

## 素質と環境のダイナミックな絡み合いは アクチュアリティとしての現実にある ——拙著に対する内海氏の書評を受けて——

小林 隆 児\*

本学会誌最新号に拙著『自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く—関係発達精神病理学の提唱—』（ミネルヴァ書房）に対する内海新祐会員の書評が掲載された（内海, 2017）。その中で氏は著者である私に問いを投げかけている。それを読んで私はとても嬉しかった。なぜならこれほどまでに拙著を精読した上で真摯に疑問を投げかけている氏の姿勢に好感を持ったからである。それと同時に、氏の問いは、これまでの私の一連の仕事が読者にどの程度理解されているか、あるいは批判されているかを知る上でとても参考になった。

私が拙著を纏めた一つに動機に、それ以前の私の書に対する書評で投げかけられた問いがあった。それは次のような内容であった。「『甘え』のアンビヴァレンスという誰にも馴染み深く、容易に理解できるような心理機制をもって自閉症スペクトラムに出現する多様な症状を理解することができるのか」

氏はこの問いに対する答えとなっているかどうかという観点から拙著に対する書評を論じるなかで、「なお問いは残る」と結論づけた上で、その理由を以下のように説明している。

大多数の乳児にとっては快や安心をもたらす刺激や関わりが脅威や侵襲と体験されてしまい、かつ通常ならばそのような場合においても養育者との関わりのなかで快や安心の方が増してくるものなのに、そのような補正がなされがたいのはなぜか。そこに子ども側のレディネス（たとえば、“人間に関心を向ける力”など）も要因の一つとして想定することは、ごく自然なことに見える。生まれ落ちた子どもにはすべて、幅やらつきがあつて当然だからである。それをしかと視ることが、「関係」とその発展の様相をより精緻に描く足掛かりになりはしないだろうか。

氏の疑問を一言で表すと、アンビヴァレンスという関係病理が生起する以前に、子どもの素質として自閉症スペクトラムをはじめとする発達障害をもたらす要因があるのではないかということになるかと思う。

\* 西南学院大学人間科学部、大学院人間科学研究科臨床心理学専攻

(〒814-8511 福岡県福岡市早良区西新6丁目2-92)

Ryuji Kobayashi: Department of Human Sciences, Seinan-Gakuin University, 6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka 814-8511, Japan

## 意見

拙著で私は関係病理を捉える視点の重要性の根拠の一つとしてつぎのように述べている。

子どもの心の成長「発達」とその「障害」がどのようにして起こるのか、その成立過程こそ、素質と環境のダイナミックな絡み合いの所産であることを考えると、乳幼児期早期における＜子ども－養育者＞関係を丁寧に観察し、そこで生起する現象にこそ目を向けるべきであって、それなくして「発達」とその「障害」の解明は不可能である。それまでの発達過程で何が起こったのか、そのことがこれまでブラックボックス化され、誰も積極的に見ようとしてこなかったことが最大の問題である。脳障害といった仮説を前提とするのではなく、＜子ども－養育者＞関係の内実から出発した「発達」とその「障害」の解明こそいまもっとも求められている。

この点については氏も書評のなかで認めている。

以下私の回答を述べよう。

「発達」の「障害」が、素質と環境のダイナミックな絡み合いの所産であることはいまや誰も否定はしない通説となっている。

素質 (G) と環境 (E) のダイナミックな絡み合いは精子と卵子が受精した時点で胎内においてすでに開始しているとみななければならないであろうが、臨床家が生誕後の乳児に出会うであろういかなる時点においても、実際にはGとEの絡み合いのなかで、Gは $G_1 \rightarrow G_2 \rightarrow G_3 \rightarrow \dots$ に、Eは $E_1 \rightarrow E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow \dots$ へと変容を遂げていく。したがって原初のかたちとしての純粋なGは、理論上は仮定しようとしても、現実的にそれを掴むことは原理的に不可能である。もしそれを探求しようとするれば、無限後退<sup>1</sup>に陥るこ

とは目に見えている。そのことは氏も「鶏と卵問題」として指摘しているところである。

ただ、ここで注意を喚起しておきたいのは、G = 子ども、E = 母親、と短絡的に考えてはならないことである。「ダイナミックな絡み合いの産物」としての心のありようは、子どもと母親との「あいだ」に立ち上がり、不断に変容を遂げていくものとして捉える必要がある。私が「関係」のなかで「発達」の「障害」を捉えなければならないと主張するのはそのような理由に依っている。アンビヴァレンスはまさにそのようにして初めて捕捉することが可能になったのだ。

私たちがつぎに考えなければならないことは、臨床研究において「素質と環境のダイナミックな絡み合い」をいかに捕捉し、それをエヴィデンスとして明示することができるかという切実な問題である。

今改めて述べるが、私の主張の眼目は、関係病理を捉えるためには「関係をみる」ことが不可欠であるという点にある。では「関係をみる」臨床は、多くの臨床家が依拠している「個をみる」臨床と根本的に何が異なるのか。それは一言で申せば、前者が「アクチュアリティとしての現実をみる」ことで、後者は「リアリティとしての現実をみる」ことにある。

アクチュアリティとしての現実を捉えるために臨床家はいかなる態度を要請されるかといえ、面接全体の流れのなかで患者と治療者とのあいだに何が起きているのか、両者の心はどのように動いたのかを捉えることである。時々刻々と変化し続けるアクチュアリティとしての現実を捉えることはそのようなことを意味する。

「関係をみる」臨床を私はそのように考えているが、これまで「個をみる」臨床を生業としてきた多くの臨床家にとってなぜこれほどまで

<sup>1</sup> ある事柄をなりたたせている条件（あるいは原理や原因）を考えても、その条件をなりたたせているための条件が、同じ論拠でまた求められねばならず、さらにその条件へと、無限にさかのぼらざるをえなくなることをいう。（『哲学事典』平凡社、1971、p.1367より）

に難しいのか、その理由は最近私が試みている「感性教育」を通してとてもよくわかってきた。その詳細は新著『臨床家の感性を磨く』（小林, 2017）にゆずるが、一つだけ強調しておきたいのは、すでに数十年も子どもの臨床を蓄積し、多くの人からもその臨床力を認められている（であろう）臨床家でさえも「関係をみる」臨床は殊の外困難であることを幾度も目にしてきた。

その理由の一つは、臨床観察眼の多くが、獲得してきた専門知識に依拠しているため、目の前の母子（患者治療者）関係をアクチュアルに、ありのまま素朴に捉えることを困難にしていることである。「関係をみる」ためには、情動の動きに着目しなければならず、そのためには臨床家自らの情動の動きをモニターすることが求められる。つまりは「関係を」通した他者理解のためには自己理解が不可欠だということである。

なぜこのようなことを指摘するかといえば、私がこれまで「感性教育」を学部生や大学院生に試みるなかで、彼らが「感性教育」をどのように体験したか、その体験談を聞くにつれ、彼ら自身も自らの幼少期のアンビヴァレンスの体験自体に無意識に蓋をして、それに向き合うことを回避し、親の期待を取り入れて「いい子になる」ことで、あるいは先入観や専門知識によって自らのアンビヴァレンスに対処してきたことが率直に語られている（小林, 2018a）からである。いかなる臨床家であれ、他人事ではないはずである。

さらに気づかせられたのは、子どもの臨床家の多くは子どもに対する強い思い入れがあるために、まるで子どもの気持ちの代弁者であるかのようにして、子どもの思いを押し量る傾向がとても強いことである。私が臨床で出会う子どもたちは、強いアンビヴァレンスに圧倒されて自らの思いがどこにあるか、それさえも気づくことが困難な状況に置かれている。それゆえ、子どもたちの思いを代弁するかのように語る臨床家も、子どものアンビヴァレンスという情動

の動きを結果的に掴み損なっているのだ。

氏の問いに対する私の回答を端的に述べると、氏が想定している子ども側のレディネス（たとえば、“人間に関心を向ける力”など）は、「関係をみる」臨床の立場からいえば、私はそこに子どものアンビヴァレンスを、そして同時に母親のアンビヴァレンスをも掴み取っている。つまり、そこに私はすでに関係病理を見て取っていることになる。それは“人間に関心を向ける力”の脆弱性などという子どもの側の素質に帰することのできない、素質と環境のダイナミックな絡み合いの産物だということである。氏のそれは子どもの側に原因を帰するという個体能力障碍観に根ざしたものの見方だということになろう。

最後に、最近身近に体験した乳児とその母親との初期の面接で、私が「関係をみる」臨床をどのように実践しているか、その具体例を示そう。「関係をみる」臨床が、母子双方のいかなる側面に着目してなされているか、理解の一助となればとの思いからである。少々長くなることをお許し願いたい。

生後7ヵ月の男児で、母親の相談はつぎのような内容であった。

視線が合わない、表情に乏しい、自閉症スペクトラムではないか、ということである。

私の診察を受けたいとの希望で、1時間半あまりかけて自家用車で受診してきた。母親は学校関係の仕事に従事していて、いまは育児休暇を取っているということであった。

初回面接で母親はとても冷静に要領よく今の心配事を語っていた。こちらの質問にも抵抗なく応じている。私は話を聞いていて、頭の良い人だなという印象を持った。

さらに母親の話を聞いていくと、つぎのような内容であることがわかってきた。

出産の時の産声を聞いたとき、これはおかし

## 意見

いと思った。泣き声があまりにも弱々しく、「おぎゃー」と元気よく泣かなかった。その後、どんどん心配なことが増えていった。生後2ヵ月、縦抱きにすると大丈夫だったが、なぜか横抱きすると、嫌がってのけぞる。3ヵ月、抱っこすると視線が合わなくなった。以後、どんどん心配は募っていった。相変わらず泣くことが少なく、しかも弱々しい。昼寝をしているときが長すぎて不安になる。その後も、暗いところでひとりおとなしくじっとして起きていることがあるなど、つぎつぎに心配事は増えていったと言う。

面接室で、母親はソファに腰掛けていたが、子どもを私の方に向けて、膝の上に座らせていた。自分の方に向けて抱いていないのは、子どもが嫌がるからなのかなと想像しながら見ていた。私が気になったのは、そのときの子どもの様子だった。私の方を見つめていることが多いのだが、人見知りすることなく、自分を抱えてくれている母親の方に振り向くこともない。子どもを母親の方に向かせると、すぐに顔を横に向けて目をそらす。表情は硬く、あまりにもおとなしく、ほとんど身体を動かすことなく、じっとしている。口元を閉じているが、妙に力が入っていることがわかる。周囲の刺戟に圧倒され身動き一つとれない、私にはそんな深刻な状態に見えた。

ついで私は子どもを抱いてみた。とくに嫌がることもなく、ただじっと抱かれていた。全身に強い緊張が感じられ、あやしても反応は乏しいことから、このような状態はかなりの長期間続いているのではないかと推測していた。

そんな様子を観察しながら、母親の話を聞いていったが、子どもに関する心配を一通り聞いたあと、母親自身の生活歴について尋ねていった。母親の職業と夫の職業が同じだったので、私は何気なく「職場結婚ですか」と尋ねた。すると、なぜか「職場結婚・・・というわけでも・・・なくて・・・」と、急に言い淀んで、歯切れが悪くなったのである。さらに「恋愛結婚ですか」とも尋ねたが、このときも同じように歯切

れの悪い反応であった。秘密にするような内容でもなかろうに、なぜ私の質問に急に言い淀んだのだろうかと気になった。しかし、この時にはそのことには触れず、母親の心配を聞くに留めておくことにした。その方が賢明だと判断したからである。

その後、母親自身の両親について尋ねた。すると両親、それもとりわけ父親から非常に厳しく育てられたことが語られ始めた。具体的なエピソードとしては、学校の試験で100点満点の96点しかとれなかつただけで、手厳しく叱られ、なぜ4点間違えたのか、徹底的に間違いの原因を追及され、責め続けられて、わからないと殴る、蹴るなどの暴力を振るわれた。そうかと思うと、時にころっと機嫌が変わって、菓子を買ってくれることもあったと言う。しかし、そんな大変な話にもかかわらず、冷静な口調で語っていたし、父親に対して憎しみや恨みを述べることもなかった。私は聞きながら、「それは大変だったんでしょうね」と相槌を打つに留めておいた。

ただ、母親との面接を進めて後半になると、子どもの声が小さいながらも時折出るようになった。そして、こちらを見ては怪訝な顔を見せつつも、少し表情が緩むな瞬間を認めた。それを確認して、私の見通しは少し楽観的なものになった。

この時点で、母親自身の育ちと母親の子育ては深く関係しているであろうことは容易に推測できたが、私はそのことにも触れないでおいた。とにかくこのまま放置してはいけないことは確かであったので、私は母親に「おうちで二人で過ごしているととても心細くて不安でしょうね」と述べて同情を示すと、母親はすぐに涙目になり、不安な気持ちを正直に語る事ができた。そこで私は「これからしばらく定期的に面接をしませんか」と提案し、「いろいろと工夫しながらみていきましょう」とだけ伝え、具体的な対応までは助言しなかったが、大丈夫ですよと安心付けておくことは忘れなかった。

初回の面接で、私は以下のように見立てた。完璧を求められて育ってきた母親にとって、出産直後からの子どもの泣き声に始まる様々な反応がすべて不安の材料となっているが、おそらく子どもにとって不安に満ちた母親の眼差しは、安心の拠り所とはなりえず、子どもの不安をより一層増強させてしまい、母子間に負の循環が生まれていったのであろう。そして、たとえ子どもの変化が良好な兆しを示すものであっても、この母親の思い描いた理想の子どもの姿からすれば、否定的な色彩を帯びて映り、母親の不安はより一層高まっていったのであろうと思われた。そこに私は「無い物ねだり」の心理を見て取ることができた。

2週間後に母親は約束通り受診した。早速2週間の様子を尋ねた。すると、開口一番、「1週間前に夫の母親が訪ねてきたのですが、母親が子どもを抱くとすぐに泣いたんです。夫がそれを見て、「あ、この子も人見知りして泣くんだった」と叫んでいました」と報告したのである。母親の声にも控えめながらも喜びの感じが伝わってきた。

私は母親の報告を聞きながら、前回と同様に子どもを抱っこしてみた。すると、前回とは異なり、少し戸惑ったような表情を見せるとともに、遠慮がちに母親の方に顔を向けた。でも泣くことはなく、再び私の方に視線を戻した。まもなく再び母親の方に顔を向けて、心細そうな顔を見せた。そこで私は母親に「抱っこしてあげてください」と伝えて、子どもを手渡した。母親は子どもを抱きかかえて自分の胸に押し当てるようにした。当初子どもはどことなく遠慮がちで、母親にしっかりとしがみつ়くことはなかったが、のけぞったり、母親から目をそらすことはなかった。

面接の前半では、まだ子どもには緊張が少し感じられ、発声もほとんど見られなかった。しかし、次第に子どもは弱々しいながらも「あー」と時折声を出すようになった。前回よりもより確かなものを感じさせた。私は「これはよい兆

候だ」と思い、すぐに子どもの声の大きさやテンポに合わせながら控えめに声で応じるようにしていった。

その後、私はしばらく二人の様子を黙って見守っていた。そしておもむろに「お母さんに抱かれて安心しましたね」と嬉しそうに伝えた。そして、私は母親に「さきほど赤ちゃんがお母さんの方を見たとき、お母さんはどんな気持ちがありましたか」と尋ねてみた。すると母親は少し遠慮がちに「心細そうで不安そうな表情をして、私を求めました」と語った。そしてそれは母親にとって初めての体験だったことが語られた。私は感動で胸が熱くなっているのを感じていた。

再び母親は私の方に子どもを向けて膝の上に座らせて話し始めた。しかし、前回と違って、子どもは後ろにいる母親の首のあたりに腕を伸ばしてさかんに触りだした。すると母親はその手を払いのけてしまった。そんなやりとりが何回か繰り返されていた。そこで私は母親に「赤ちゃんはお母さんに触りたいようだから、触らせてやって」とやさしく伝えた。母親は私の助言に素直に従って、子どもがやりたいように相手をするできるようになった。子どもは最初遠慮がちであったが、まもなくさかんに触るようになった。母親は子どもを正面から抱くようになり、<抱く—抱かれる>ふたりの姿勢も自然な感じになっていった。私は母親に「抱いた感じはどうですか」と尋ねた。すると、母親は「リラックスしているようですね。身体も以前のような硬い感じがなくなりました」と嬉しそうに語っていた。

そんな二人の様子をみて私も安心したので、前回の面接で気になっていたことを母親に尋ねた。職場結婚、恋愛結婚についての質問の際の不自然な反応についてである。すると母親はとても素直に、「誰かに質問されて答えようとする、すぐに私の答えを相手はどう思うかが気になって、ついどうしたらよいか戸惑ってしまい、あんな反応になるのです」と答えた。私はそこ

## 意見

に母親の、何か言おうとするとすぐにブレーキがかかる、強いアンビヴァレンスを感じ取ることができた。それと同時に、私の質問でとくに戸惑ったのはなぜかを考えてみた。なぜなら自分の心配を語るときには沈着冷静に語れる人がどうして私の何気無い（と思っていたが）質問に困惑したのか気になったからである。まもなく、私の質問は夫との関係に関するもので、彼女は夫とのつながりがどのようなものかを尋ねられたため、彼女は強い困惑を示したのではないかとの思いに至った。自分の夫に対する感情に触れる質問だったからこそその反応ではなかったのかということである。

以上の臨床記述は、最近の講演（小林, 2018b）の一部を引用したものである。その詳細については当該の拙論を参照していただきたいが、ここで特に着目してほしいのは、子どもの様子を観察する際に、母親との関係の相で捉えていくと、子どものほんの些細な言動でもその意味がとともよくわかることである。子どものこころの動きはそうした観察を通してはじめて捉えることができる。私はそこに子どものアンビヴァレンスを肌で感じ取っているということになる。

学会の存在意義の一つは、専門領域に関する最新の知見を出し合い、会員相互で切磋琢磨しながら自説を鍛え上げていくことにある。それが結果的に、その専門領域の発展に貢献することにもなる。最近、私はいくつかの専門学術誌の掲載論文や著書に対する討論を試みたことがある（小林, 2013；小林, 2016）。しかし、残念なことに、それらに対して相手からなんら反応がなかったことをとても残念に思った。学会活動の内実がそこによく反映されていることを知った。

年々細分化し、増加の一途を辿っている諸々の学会は、共通の関心をもつ者同士で学び合うことには熱心だが、真摯に討論し合うことにはいたく消極的にみえる。

その点からすれば、今回の拙著に対する氏の書評は著者である私への真摯な問いの投げ掛けである。それゆえ、私は氏の問いに誠実に答えなければならぬと考え、すぐに筆を取った次第である。おかげで、私の考えがさらに鍛えられた思いである。今回の氏の労に対して心よりお礼を申し上げますとともに、この回答に対してさらなる問い掛けがあれば、それをも期待して、とりあえず筆を擱くことにしよう。

追伸：先に述べた討論（小林, 2016）に対する回答がなされた（内海, 2017）ことを、本稿を書き終えてからしばらくして知った。この時私はすでに学会を退会していたからである。残念ながら、それはあまりにも遅い回答であったといわざるをえない。

## 引用文献

- 小林隆児 (2013). 関係からみた PDD 型自己 (広沢) について—広沢論文「成人の高機能広汎性発達障害の特性と診断」を読んで—, 精神神経学雑誌, 115 (3) 253-260.
- 小林隆児 (2016). 精神病理学におけるエヴィデンスを考える—内海健著『自閉症スペクトラムの精神病理』を読んで, 臨床精神病理, 37 (2) 139-146.
- 小林隆児 (2017). 臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—, 東京, 誠信書房.
- 小林隆児 (2018a). なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか, 西南学院大学人間科学論集, 13 (2) 215-243.
- 小林隆児 (2018b). 乳幼児期早期に出現する症状を「関係」と「情動(甘え)」から読み解く, 西南学院大学人間科学論集, 13 (2) 245-264.
- 内海新祐 (2017). 書評 小林隆児著『自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く—関係発達精神病理学の提唱—』(ミネルヴァ書房), 乳幼児医学・心理学研究, 26 (2) 145-146.
- 内海健 (2017). 精神病理学の猥雑性を排す—小林隆児「精神病理学におけるエヴィデンスを考える」への回答—, 臨床精神病理, 38 (3), 339-348.